

自己愛人格傾向の高い者の他者操作行動が友人からの評価に与える影響

小西 瑞穂・田中 祐衣⁽¹⁾

問題と目的

自己愛(narcissism)とは、ギリシャ神話において池に映る自分の美しさに見とれてしまったという若者ナルキッソスから由来しており、自己に愛着を感じ、自身をとて美しい存在であると感じる状態(町沢, 2005)をさしている。自己愛という言葉は1898年にEllisが導入し、“自己愛は性的な倒錯であり自身を性的な対象として見なすもの”と述べた。その後Freud(1964)はこの言葉を用い、自己没入あるいは自己愛といったような一般的な態度にこの言葉を使うようになった。また、Kohut(1971)は自己愛が健全に育った場合には創造力とユーモアを育てることが可能であると述べている。日本ではうぬぼれや耽美といったニュアンスで使われることが多く、主に思春期から青年期にその傾向がみられると町沢(2005)は報告している。

1980年代には、自己愛性パーソナリティ障害という一種のパーソナリティ障害が注目を集めた。DSM-IV-TR(APA, 2002)によると、この自己愛性パーソナリティ障害は誇大性、賞賛されたい欲求、共感の欠如といった要素から成り立っている。自己愛性パーソナリティ障害は主に青年期によく見られるがそのまま一生続くことはなく、加齢とともにある程度は正されていくと考えられており、男性がその障害全体の50~75%を占めている。

対人関係においては、自己愛性パーソナリティ障害の者は共感の欠如や他人への嫉妬、他者を不当に利用する、といった傾向が見られる。町沢(2005)は、日本では謙譲・謙遜を美德としており、非常に防衛的な特性によって、威張る、誇大的に振舞う、横柄であるといったことがあまり表面に出ないようになっていと述べている。つまり、一見抑うつ的でありながら内面はきわめて自己愛的である、という二重構造をなしている者がよく見られることを論じている。

自己愛性パーソナリティ障害は自己愛人格傾向の延長線上に存在すると考えられ、Fromm(1956)はこの自己愛人格傾向を、自己愛性パーソナリティ障害という臨床的問題ではなく、健常者に見られるパーソナリティ特性の1つとして捉えている。また、小西・山田・佐藤

(2008a)は、自己愛人格傾向の高い者には他者からの注目を集めたいという欲求や顕示的で自信に満ちているといった特徴があることを明らかにしている。この自己愛人格傾向の高い者の友人関係のあり方について、小塩(1999)は高校生男子を対象に調査を行った。その結果、自己愛人格傾向の高い男子高校生はクラスメイトから好かれており、比較的多くの友人との関係を持っていた。また一方で、自己愛人格傾向の高い者は他者から信頼されたいという欲求を抱く傾向にあり、自己愛人格傾向の高い者ほど自身の欲求とクラスメイトの評価との間に差が生じる可能性も指摘している。

このように、自己愛人格傾向の高い者が対人関係を築いていく中で、自身の欲求と他者との評価を一致させるために友人関係のあり方や過ごし方が重要になってくると考えられる。そこで、Gunderson(1984 松本・石坂・金 訳 1988)や憲・衣笠・伊藤(1996)は自己愛性パーソナリティ障害の者における他者操作という対人行動パターンについて言及し、自己愛性パーソナリティ障害の者は誇大化して現実性を失った自己評価を確認するために、他者からほめられることを求め、他者を利用すると述べている。この他者操作行動について、寺嶋・小玉(2003)は日常的に存在する操作に関して検討するために大学生を対象に調査を行い、他者操作行動を測定できる尺度を開発した。その際、臨床群における操作は“利己的で高圧的に他者をコントロールして自己の利益を得ようとする行動”と“他者からのケアを引き出そうとする行動”という2側面に集約されることを示し、これらの臨床的指摘を参考として尺度を作成した。この尺度を用いて検討を行った結果、程度の違いこそあるが、誰もが行うであろう日常的な行動スタイルとして、他者操作行動は臨床場面で問題となる他者操作行動の延長線上にあることを明らかにした。また、その中で自己の優越性をアピールして相手に何かをさせるよう仕向ける他者操作行動は自己愛性パーソナリティ障害の者に特徴的に見られる他者操作行動、自己の劣位性をアピールする操作は境界性パーソナリティ障害の者に特徴的に見られる他者操作行動と類似していることを見出した。

次に、寺嶋・小玉(2007)は他者操作行動を行う背景にはどのような要因が存在するのかを検討するために、個人内要因について検討した。その結果、優越性操作は誇大化した自己評価を確認するために他者から注目・賞賛されたいという欲求が高まった際に、さらにあえて自己の優越性をアピールすることで他者からの良い評価を引き出そうとするために行うことが明らかとなった。また、強い自己肯定感が卑下性操作に正の影響を及ぼすことも明らかとなった。寺嶋・小玉(2007)は、これには自尊心の低さと強い肯定感の共存関係が背景にあると指摘している。さらに、この点について寺嶋・小玉(2007)は、自己卑下的である日本人は自己卑下的に振舞っても他者からそのことの否定という反応を得ることができるため、自尊心回復の手段として卑下性操作を用いているのであろうと考えた。そして、強い自己肯定感と低い自尊心の共存という不安定さから情緒的依存欲求が高まったときには卑下性行動操作および卑下性感情操作を、注目・賞賛欲求が高まったときには優越性行動操作および優越性感情操作と卑下性感情操作を行うという過程を明らかにした。しかし、操作をする相手や関係性については指摘されておらず、これらが影響を及ぼす可能性が十分考えられることも指摘している。

そこで本研究では、日常生活で最も長く時間を共有し他者操作行動の対象にもなっているであろう最も親しい友人を対象として、日常的に自己愛人格傾向の高い者が自己評価の確認や自尊心の保持といった精神的安定のために行うと推測される他者操作行動についての検討を行うこととした。また、先に示した寺嶋・小玉(2007)による他者を操作することに影響を及ぼす個人内要因の検討結果から、自己愛人格傾向の高い者の特徴には注目・賞賛欲求や強い自己肯定感があることから、優越性操作および卑下性操作の両方を行うであろうという仮説を立て検討する。

基本的に自己愛人格傾向の高い者は肯定的な自己イメージを持つが、その肯定的な自己イメージは不安定であることや自己評価の正確性に欠けることが指摘されている(小塩, 2007)。また、自分自身では非常にポジティブな自己イメージを保持しているにもかかわらず、他者は必ずしもそのようなイメージを持っていない可能性がある。小塩(2007)はこの自己イメージについて、他者もつイメージとの差違と自己愛人格傾向との関連を検討した。その結果、自己愛人格傾向の高い者は低い者よりも知的で能力があると自己評価する一方で、友人からは必ずしもそのように認識されてい

なかつたり、自己愛人格傾向の高い者は自身を調和的な人物であると捉える一方で、友人からはそのような捉えられていなかったりすることが明らかになった。また、自己愛人格傾向の高い者は自身を外向的で知的、やさしく勤勉であり不安や悩みが少ない傾向にあるなど、自身を総じて肯定的に捉える傾向にある。しかし、友人の評価を見ると必ずしも自己愛人格傾向の高い者に対して知的であり調和的であるというイメージを有しているということはなく、友人と自身の間にイメージの差異が生じることが明らかになった。そこで、自己愛人格傾向の高い者が行う他者操作行動が、自己愛人格傾向の高い者に対する友人のイメージ評定に及ぼす影響を検討する。仮説としては、自己愛人格傾向の高い者は利己的で高圧的に他者をコントロールするため、他者からのイメージは否定的になると考えられる。

以上より本研究では、自己愛人格傾向の高い者が行うであろう他者操作行動の検討に加え、他者操作行動の対象となると予測される親しい友人から自己愛人格傾向の高い者に対するイメージを調査し、他者操作行動を媒介した場合に他者からのイメージにどのような影響を及ぼすかを検討する。

方 法

調査対象者 岐阜県内の大学生 281 名を対象とし、調査を行った。調査対象者およびその最も親しい友人の両方のデータがそろった者を有効回答として扱った。有効回答者はそれぞれ 122 名であった。調査対象者の内訳は男性 37 名、女性 85 名であり、平均年齢は 19.30 歳 ($SD=1.38$ 歳) であった。また最も親しい友人の内訳は男性 39 名、女性 83 名で、平均年齢は 19.45 歳 ($SD=1.54$ 歳) であった。

質問紙 1. 自己愛人格傾向尺度: 小西・大川・橋本(2006)の自己愛人格傾向尺度(Narcissistic Personality Inventory-35, 以下 NPI-35 と略記する)を使用した。この尺度では、注目欲求(10 項目)、誇大感(8 項目)、主導性(9 項目)、身体賞賛(3 項目)、自己確信(5 項目)の 5 因子 35 項目から構成されており、“非常にあてはまる”から“全くあてはまらない”の 6 件法で回答を求めた。合計得点が高いほど、自己愛人格傾向が高いことを示している。本研究では、自己愛人格傾向の高さが他の変数にどういった影響を及ぼすかを検討するため、下位尺度ごとでは使用せず、NPI-35 全項目の得点を用いることとした。

2. 他者操作行動尺度: 寺嶋・小玉(2003)の他者操作行動尺度を用いた。この尺度は卑下性行動操作(5 項目)、優越性行動操作(5 項目)、卑下性感情操作(4 項目)、優

越性感情操作(4項目)の4つの下位尺度から成り立っている。それぞれの項目に対し、“よくする”から“まったくしない”の6件法で回答を求めた。各下位尺度の得点が高いほど、各他者操作行動が高いことを示す。

3. 友人からの評価尺度: 調査対象者の最も親しい友人に、調査対象者の印象を特性形容詞尺度(林, 1978)を用いて評定を求めた。下位尺度の構成は、個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、活動性(力本性)の3つであり、“積極的な-消極的な”“人のわるい-人のいい”などの20項目に対して7段階評定で回答を求めた。

手続き 大学の講義時間の一部を利用して質問紙と封筒を配布し、調査を依頼した。質問紙は2部配布し、一方は調査対象者用、一方は調査対象者の最も親しい友人用とした。調査対象者には最も親しい友人に質問紙を渡して回答してもらい、封筒に入れ厳重に封をして提出するよう求めた。調査対象者用の質問紙は回答終了後にその場で回収し、最も親しい友人用の質問紙は後日封筒に入れた状態で調査対象者から回収した。

倫理的配慮 調査対象者に対しては口頭および書面にて、その友人に対しては書面にて、研究の目的と内容、本人の意志により調査協力の撤回が随時可能であること、得られたデータは研究目的以外の目的で使用しないことを説明し、署名にて同意を得た。また、データは個人が特定できないよう保管・統計処理を行い、研究結果については後日公開することを伝えた。

結果

友人からの評価尺度の因子分析 友人からの評価尺度について、林(1978)は個人的親しみやすさ、社会的望ましさ、活動性(力本性)の3因子を抽出したが、回答の際に設定する相手との関係によって解釈や結果が異なるという指摘があり、本研究では全20項目に対し主因子法 Varimax 回転の因子分析を行った。因子負荷量が.40以上であることを基準とし、各因子に十分な負荷量を示さない、あるいは複数の因子に.40以上の因子負荷量を示したものをその都度削除しながら分析を行った。その結果、4項目を削除し、3因子を抽出した(Table1)。

第1因子は“非社会的な-社会的な”、“積極的な-消極的な”などを含む8項目であり、外部に対して行動的であることから外向性と命名した。第2因子は“不親切-親切”、“人のわるい-人のよい”などを含む4項目であり、得点が高いほど周囲に対して協力的であり、調和的な面を表していることから調和性と命名し

た。第3因子は“分別のある-分別のない”、“責任感のある-責任感のない”などを含む4項目であり、得点が高いほど社会や共同体の中で守るべきである道徳的な部分を表していることから誠実性と命名した。

NPI-35, 他者操作行動および友人からの評価尺度の記述統計値と相関係数 NPI-35, 他者操作行動尺度の各下位尺度、友人からの評価尺度の各下位尺度の合計得点を算出し、各尺度および各下位尺度の記述統計値をTable2に示した。 α 係数は.73~.96であり、各尺度および各下位尺度ともある程度の内的整合性を示した。

その後、各尺度および各下位尺度間について相関分析を行い、相関係数をTable3に示した。NPI-35は他者操作

Table1. 友人からの評価尺度の各項目と因子負荷量 (主因子法・Varimax 回転)

項目	因子負荷行列		
	I	II	III
【第I因子:外向性】			
7. 非社会的な—社会的な	.74	.30	-.10
12. 沈んだ—うきうきした	.70	.19	-.05
1. 積極的な—消極的な	-.70	.20	-.01
18. 自信のない—自信のある	.68	-.07	.19
13. 堂々とした—卑屈な	-.66	-.13	-.03
17. 無気力な—意欲的な	-.65	.22	.13
10. 恥じ知らずの—恥ずかしがりの	-.47	.23	.31
4. ひととなつこい—近づきがたい	-.40	-.24	-.05
【第II因子:調和性】			
2. 人のわるい—人のよい	.12	.77	.19
14. 感じのわるい—感じのよい	.15	.77	.24
20. 不親切—親切	.22	.73	.23
5. にくらしい—かわいらしい	.07	.62	.29
【第III因子:誠実性】			
15. 分別のある—分別のない	-.02	-.10	-.74
11. 重厚な—軽薄な	-.08	-.31	-.64
9. 軽率な—慎重な	-.25	.34	.59
8. 責任感のある—責任感のない	-.21	-.27	-.45
寄与率(%)	21.50	16.77	11.80
累積寄与率(%)	21.50	38.26	50.06
α 係数	.74	.85	.73

Table2. 各尺度および各下位尺度の記述統計値と α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数
1. NPI-35	91.59	28.22	.96
他者操作行動尺度			
2. 優越性行動操作	12.28	4.82	.86
3. 優越性感情操作	10.92	4.90	.86
4. 卑下性行動操作	11.12	4.09	.82
5. 卑下性感情操作	11.23	4.00	.80
友人からの評価尺度			
6. 外向性	37.08	6.31	.74
7. 調和性	22.55	3.79	.85
8. 誠実性	19.17	3.92	.73

Table3. 各尺度および各下位尺度の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. NPI-35	—	.29**	.36**	.26**	.54**	.27**	.06	-.12
他者操作行動尺度								
2. 優越性行動操作		—	.67**	.62**	.69**	.09	-.00	-.04
3. 優越性感情操作			—	.50**	.58**	-.05	-.17	-.18*
4. 卑下性行動操作				—	.66**	.09	.14	-.00
5. 卑下性感情操作					—	.21*	.20*	.01
友人からの評価尺度								
6. 外向性						—	.40**	.20*
7. 調和性							—	.52**
8. 誠実性								—

$p < .01^* * p < .05^*$

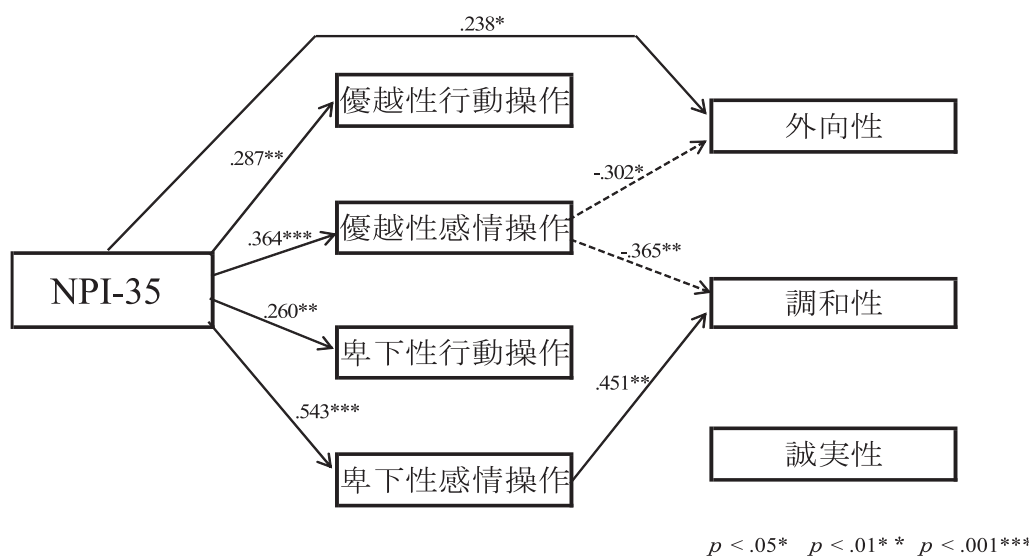


Figure1. 自己愛人格傾向が各他者操作行動を通して、友人からの評価に与える影響

行動の各下位尺度との間に有意な正の相関を示し、特に卑下性感情操作には $r = .54 (p < .05)$ と他の相関係数と比べて高い数値を示した。また、NPI-35 と友人からの評価尺度との関連については、NPI-35 と外向性との間に有意な正の相関を示した。操作行動の各下位尺度と友人からの評価尺度の各下位尺度の間には、優越性感情操作と誠実性との間に有意な負の相関が、卑下性感情操作と外向性、調和性との間に有意な正の相関がみられた。しかし、その他の他者操作行動尺度の各下位尺度には有意な相関はなかった。

自己愛人格傾向、他者操作行動が友人からの評価に及ぼす影響の構造 自己愛人格傾向と他者操作行動が他者からのイメージにどのような影響を及ぼすかを検討するため、NPI-35 を基準変数、他者操作行動の各下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。しかし、説明変数である優越性行動操作と卑下性感情操作との間に $.69 (p < .01)$ とやや高い相関関係があるため、多重共線性の判定を行った。その結果、VIF (Variance Inflation

Factor) は $.288$ であり、解釈可能な範囲と判断したため、他者操作行動の各下位尺度をすべて投入し、分析を行った。次に、NPI-35 と他者操作行動の各下位尺度を基準変数、友人からの評価尺度の各下位尺度を説明変数とする重回帰分析を行った。有意であったパスとパス係数を Figure1 に示した。NPI-35 は他者操作行動のすべての下位尺度に正の影響があった。また、NPI-35 は、外向性に直接正の影響を及ぼした。優越性感情操作を媒介した場合には、外向性、調和性に負の影響を与えた。さらに、NPI-35 は卑下性感情操作を媒介して調和性に正の影響を及ぼした。なお、誠実性はどの下位尺度からも有意な影響がなかった。

考察

本研究では、自己愛人格傾向の高い者が用いる他者操作行動が友人からのイメージにどのように影響するかを検討した。その結果、自己愛人格傾向から優越性行動操作、優越性感情操作に正の影響が確認され、自己愛人格傾向が高いと優越性操作を行いやすいことが明らかに

なった。また、特に優越性行動操作に比べて優越性感情操作の方が強い影響が認められた。これは自分を優位な立場として相手に何らかの行動を迫る優越性行動操作より、自分を優位な立場として相手から褒めてもらう、あるいは驚かせる優越性感情操作が、自らの感情面に肯定的な言葉を受け、より自分の誇大化した自己評価を確証できることとなり、自己愛人格傾向の高い者が有する注目欲求が満たされるためではないかと考えられる。さらに、自己愛人格傾向から卑下性操作に対しても有意な正の影響が示されており、特に他の操作に比べて卑下性感情操作に強い正の影響があった。寺島・小玉(2007)は、卑下性感情操作は強い自己肯定感と低い自尊心が背景に存在することが要因となって操作が行われると述べている。また、自己愛人格傾向の高さと自尊心の関連について、自己愛人格傾向の高さは積極的に自己を肯定する自尊心に関連するにも関わらず、社会的な不安にも関連しており、自分で自信を持っていても他者からの評価によって容易に崩れてしまうことを小塩(1998a)が報告している。つまり、この低下した自尊心を回復するための手段として、自己愛人格傾向の高い者は卑下性感情操作を行うのではないだろうか。このように、自己愛人格傾向の高い者は優越性および卑下性操作の両方を用いるという仮説は支持された。

次に、自己愛人格傾向は優越性感情操作を媒介して調和性に負の影響を与えていた。この点については、自己愛人格傾向の高い者の特性の1つに、他者から注目を集めたいという欲求があり(小西他, 2008a)、この欲求によって自己をアピールして他者から褒められようとする、あるいは自身の体験を誇大化させて大げさに話し驚かせようとする優越性感情操作を行う(寺島・小玉, 2007)と考えられる。その結果、他者は自己愛人格傾向の高い者から、自身の優れた部分をアピールするような自慢話や誇大化させた体験談を聞くことになることが予測される。これにより他者は自己愛人格傾向の高い者に対して自分本位であると感じ、調和性が低いことを示す“感じのわるい”“にくらしい”などの印象を抱きやすいのではないかと考えられる。また、自己愛人格傾向の高い者は外向性が高いイメージを持たれやすいことに対し、優越性感情操作を媒介すると外向性が低いイメージとなるという結果になった。町沢(2005)は、自己愛人格傾向の高い者は日本文化においてはそれを日常生活の中で強く表出することがないと報告している。しかし、優越性感情操作を行うと、他者に対して自分自身をアピールし、自身を誇張させて表現するといった自己愛的な部分を表出するということになる。また、日本社会ではこのよ

うな行動が強く歓迎されることは考えにくく(小西・山田・佐藤, 2007)、自己愛人格傾向の高い者はそうでない者と比べて他者から関心を示されない、あるいは拒絶的な反応を受ける傾向がある(Carroll, Hoenigmann-Stovall, & Whit-chead, 1996)という指摘がある。従って、自己愛人格傾向の高い者が優越性感情操作を用いた場合、他者からのイメージは“非社会的な”“近づきたい”など外向的ではないと感じられるのではないかと考えられる。従って、自己愛人格傾向の高い者への他者からのイメージは否定的であるという仮説は支持された。

しかし、この仮説に反して、自己愛人格傾向の高い者は優越性感情操作を媒介して調和性を低めるが、卑下性感情操作を媒介すると調和性を高めるという結果が得られた。これは、他者からのケアを求めるという卑下性操作の内容から、自身に対する他者からの慰めや同情といった感情を引き出し協力してもらう、という他者との関わりが見られるため、他者から“人のよい”“かわいらしい”といったイメージを受け、調和性を高めているのではないかと考えられる。

以上の結果をまとめると、自己愛人格傾向の高い者は、他者から褒めてもらうまたは他者を驚かせるなど、他者から注目され賞賛されるような優越性行動操作または優越性感情操作を用いる。また、高い自己肯定感と低い自尊心の不安定な共存から、自尊心が低下した場合の回復手段として、他者からのケアを求める卑下性行動操作または卑下性感情操作を行う可能性が考えられた。そして、優越性感情操作を用いると、自身の体験を誇大化して自慢する、あるいは自分本位であるように他者を不当に利用するといった行動から、他者からは調和的ではないという印象を得てしまうことが予測された。反対に、卑下性感情操作を多く用いると、他者との協力やケアといった関わりを持つ行動から、他者から調和的であるという印象を得ることが明らかになった。つまり、自己愛人格傾向の高い者は様々な他者操作行動を用い、友人から受けるイメージも様々であることがわかった。これは、自己愛人格傾向の高い者の対人関係の不安定性を示すとともに、他者評価によって大きく変化する自己評価の不安定性を示唆する結果と言えるかもしれない。

最後に本研究の問題点と今後の展望を述べたい。本研究では、調査人数の男女比率の不均質さから性別を分けることなく分析を行ったが、自己愛人格傾向は女性より男性のほうが高いという報告が多数あり(e.g. 小塩, 1998b; 小西他, 2008a; 小西・山田・佐藤, 2008b)、性差によって結果が異なることが考えられる。今後はサンプル数を増やし、性差を含めた検討を行うことが求められ

る。また、他者からのイメージとして最も親しい友人を対象としたが、その友人に対しても性別や年齢を指定せず、1人のみに対して調査を行った。他者からのイメージは親族や相手の年齢、性別など、人物によってイメージに差異が出るのではないかと考えられるため、様々な他者要因を含めて検討する必要があるだろう。

引用文献

- American Psychiatric Association (2002). Diagnostic and statistical manual of mental disorders, Forth Edition Text Revised; DSM- IV TR. Washington, DC; Author.
- Carroll, L., Hoernigmann-Stovall, N. & Whitehead, G. I. (1996). Interpersonal consequences of narcissism. *Psychological Reports*, **79**, 1267-1272.
- Freud S. (1964). Three Essays on the Theory of Sexuality (1905)- Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Vol.7 London, Hogarth Press,
- Fromm, E. (1956). The art loving. New York; Harper & Brother Publishers. (フロム, E. 鈴木 晶 (訳) 1991 愛するという事 紀伊国屋書店)
- Gunderson, J. G. (1984). Boedlerline personality disorder Washington DC: American Psychiatric Press Inc. (ガンダーソン, J. G. ・松本雅彦・石坂好樹・金 吉晴 (訳) (1988). 境界パーソナリティ障害—その臨床病理と治療— 岩崎学術出版社)
- 林 文俊 (1978) 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), **25**, 233-247.
- Kohut H. (1971). The Analysis of the Self - New York, International Universities Press,
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 (2006). 自己愛人格傾向尺度 (NPI-35) の作成の試み パーソナリティ研究, **14**, 214-226.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 (2007). 自己愛人格傾向とポジティブ・イリュージョンとの関連 同志社心理, **54**, 7-18.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 (2008a). 自己愛人格傾向についての素因—ストレスモデルによる検討 パーソナリティ研究, **17**, 29-38.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 (2008b). 自己愛人格傾向とポジティブ・イリュージョンとの関連 同志社心理, **54**, 7-18.
- 町沢静夫 (2005). 自己愛性人格障害 駿河台出版社
- 小塩真司 (1998a). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 (1998b) 自己愛傾向に関する一研究 —性役割感との関連— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **45**, 45 - 53.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 小塩真司 (2007). 自己愛傾向と自己イメージ・友人によるイメージ間の差異との関連 中部大学人文学部研究論集, **18**, 1-15.
- 應 智彦・衣笠隆幸・伊藤 洸 (1996). 境界例とその周辺 金剛出版
- 寺島 瞳・小玉正博 (2003). 他者操作行動尺度作成の試み—信頼性・妥当性の検討— 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 153.
- 寺島 瞳・小玉正博 (2007). 他者を操作することに影響を及ぼす個人内要因の検討 パーソナリティ研究, **15**, 313-322.

注⁽¹⁾ 本研究は第二著者が東海学院大学人間関係学部心理学科に提出した 2009 年度卒業論文のデータに基づいた。